

# 「偽満州国」首都新京の日本仏教による満州仏教組織化の模索

——一九三五年（康德二年）の様相——

木 場 明 志

はじめに

中国東北地域において、一九三二年～四五（昭和七～二〇）年に「満州国」（厳密には「洲」を使うが、通例により常用漢字とする）と称する傀儡国家が日本によって建国され、植民地と認識されていたことは、日本では学校歴史教科書にも載る周知のことに属する。「植民地期中国東北地域」といえば「満州国期」を指している。一方、中国ではこれを「偽満州国期」とし、ロシアと日本とによる中国東北領簞奪争いの一時期とみる。また、思想・文学方面では「淪陷時期」と呼称して、言論が極度に衰え沈んだ時代とする。「満州国」は当時の国際連盟において承認を受け

ていないし、中国との間に外交条約をもって独立建国を認知されたものでもない。事実上は占領地傀儡政権に過ぎなかったことは、「幻の満州国」という当を得た表現があることから知ることができよう。それを前提にして「偽満州国期」を対象とした小論を述べようということ自体が難題なのであるが、ここでは、まず「偽満州国」首都に選定された新京特別市（長春市）において、建国以前と以後では進出していた日本仏教界にどのような変化があったのかを概観し、「偽満州国」との関係からいわゆる日満仏教提携がどう模索され、満州仏教（中国人僧侶および在家居士によって修せられていた仏教——ここでの「満州」は地域を指している——）を日本主導で組織化した、のちの満州

国仏教総会へとつながる過程を紹介したい。建国が首都新京特別市の日本仏教界地図を塗り替えたといえる一面、および満州仏教がそれに大きな影響を蒙った一面をひもとき、同じ仏教といながら違った歴史と風土に育まれたものが、互いの交渉によって何を目指し、何を学ぼうとしたかを垣間見ておきたい。二〇〇一（平成一三）年度からは、四年計画の日本学術振興会研究助成（科研）総合研究「植民地期中国東北部における宗教の総合的研究」（代表者木場）がスタートして、この方面の研究は格段に進む予定である。ここでは、その前提としての見通しの一部に留まることをお赦し願いたい。

### 一、首都新京の日本仏教施設

いわゆる満州移民の増加とともに、中国東北部には多くの日本人僧侶が開教使の名で赴いたことはよく知られている。<sup>②</sup>もともと、東北部布教の始まりは一九〇四（明治三七）年の日露戦争開戦にともなう従軍布教使の派遣にあり、戦勝による駐留軍人への布教、および軍属・商人など居留邦人からの宗教的需要によって布教使の滞在が恒常化し、また日本勢力の現地展開によって、移民団布教も含め地域的に拡大してきたものであった。<sup>③</sup>

「偽満州国」首都新京に存在した日本仏教施設をまず掲げよう。当該時期の複数年次の地図を見れば存在を指摘できるが、日本敗戦時まで在ったものについて列挙すれば次の通りである。<sup>④</sup>

天台宗	満州布教所	新京市永楽町三一五
同	延暦寺別院	同 恵民路三〇二
真言宗	高野山金剛寺	同 祝町二一一二
同	豊山派長谷寺別院	同 新泉路四〇二
	兼開教監督部	
浄土宗	長春寺（満州山浄土院）	同 曙町四一二
臨濟宗	妙心寺別院	同 新泉路四〇四
	兼開教区教務所	
曹洞宗	曹洞宗別院	同 万宝街八〇一
	兼満州布教総督部	
浄土真宗本願寺派	新京別院	同 祝町二一六
	兼満州開教教務所	
真宗大谷派	満州別院	同 大同大街大同
	兼満州開教監督部	
同	兼満州布教所	同 胡同二〇九
同	同	同 曙町二二六
日蓮宗	経王寺	同 曙町二一二

兼満州開教総督部

同

日本山妙法寺

同

永楽町三一七

同

仏立寺

同

宝清胡同五一五

この他、新宗教や神社の施設もあったから、在来の中国寺院・道教寺院・民俗宗教系施設と併立して、新京は日本と中国の宗教施設が混在する都市であったと理解される。

日本仏教界のうちにアジア布教に熱心であったのは、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・曹洞宗・臨済宗であったことはすでに明らかにされているが、新京を中心とした「偽満州国」期を考える場合には、天台宗・真言宗も無視し得ないことが先の施設一覧から予測されるところであろう。なお、一宗で二箇所施設を持つ場合が見られるが、その所在地名に日本式町名地番がついているものは建国以前からの施設である。日本は、日露戦争によって南満州鉄道の経営権を得たが、同時に鉄道施設保安の名目で鉄道付属地をも手

中にした。具体的には、沿線両側の約八〇メートルの地と一キロあたり兵士二人の配備を権利として得たのである。これを適宜応用すれば、主要駅・重点箇所への土地と兵員の集中が可能となったわけで、建国前の新京(当時長春)の場合、駅近辺には満鉄関係施設・職員住宅が並び、その

外側に、関係するあるいは直接関係しない一般日本人居住区が設けられてあった。駅から南方に約五〇〇メートルの範囲が付属地となっており、ここに永楽町・曙町などの日本地名を冠した町が形成されていた。五〇〇メートルラインの附属地外との境界線上には関東軍司令部はじめ関東局・日本領事館などが配置され、限定領有域圏が設定されていたのである。したがって、日本仏教施設ははじめこのライン内側の日本人居住区に日本人対象の宗教施設として設けられ、建国以後、限定が外れるとともに新市街地により広い土地の保有を許可されて移転していったのだった。その際に、旧地の施設を信者や近辺の人々の要望などの諸般の事情で温存すれば、一宗二施設ということが生じたのである。新しく移った地に新築して別院兼満州布教統括部署を置くのが通常であった。

いま、一例に真宗大谷派の施設をみてみよう。一九三九(昭和一四、康德六)年大谷派満州別院編纂の『満州開教紀要』によると、

新京布教所

新京特別市吉野区曙町二丁目二

十六番地

大正八年十月一日、(中略)初め市内の一旅館に飯寓

して諸般の準備をなすこと約二旬。同月二十四日永楽町四丁目に借家し、翌十一月二十八日附を以て、関東長官の許可を得て、真宗大谷派本願寺長春布教所と公称、越えて九年一月二十五日、曙町四丁目に移り、次いで同年六月二十五日、更に室町二丁目に転じ、其間、曙町二丁目二十六番地の堂宇の建築を進め、同年十一月十五日、新築の堂宇に移転、(中略)満州国建国と共に、当地が新京と改称せられて国都に奠定されるや、(中略)やがて大同大街に満州別院完成と共に、適宜存置の方法を講ずることとなり、今日に及ぶ。

#### 満州別院 新京特別市長春区大同大街

大同二(昭和八)年七月三十一日、満州国当路の絶大なる理解の下に、新国都の中央道路たる大同大街の一角に、別院建設の用地商租の権を取得し、同じき年十月二十日には、本堂および附属建築の許可あり。その後、諸般の準備を進むること約三歳、やがて昭和十一年五月、(中略)先ず本堂建築に着手す。(中略)而して本堂は、昭和十二年五月上棟、翌十三年十月には大体竣成を見るに至る。(中略)棟高六十六尺、一四間四方、総銅屋根の純日本風伽藍(下略)

と記されている。これによっておおよその経緯を知ることができであろう。ちなみに、この真宗大谷派満州別院は規模が記されているように高さ約二二メートル、間口・奥行きともに約二五メートルの巨大な建造物で、鉄筋土蔵造りの堅固な建築物である。かつての日本仏教施設の中で唯一現存し、一九八五年に日本風遺物として長春市重要保護文物に指定されている。もともと、日本敗戦によって現地軍事機関などに接収され、日本僧が完全引き揚げした一九四六(昭和二一)年秋以降は主として学校に転用され、現在は東北師範大学附属第二実験中学の校舎の一部(本堂は近年までは図書館)として使用されている。また、本堂部分だけでなく、開教監督部などが置かれた建物や附属幼稚園の建物も学校事務室などに転用されており、当時の面影を伝える貴重な遺構となっている。

#### 二、日本仏教布教上の諸問題

「偽満州国」の建国によって変わったのは何も日本寺院の場所だけではない。日本仏教界に期待されたのは、政府が新地を与えて活動を保証・奨励することなどに対する応分の役割であった。日本仏教のアジア布教といっても、実は移り住んだ日本人を主な布教対象にしたから、ことに中

国東北地域では国策による移民奨励を背景に持ったので、研究対象としてはこれ以上あまり意味がないという議論もあるが、それは従来の研究が導き出した画一的な結論部分（日本仏教の一方的な侵略荷担）だけを見ていわれることで、実態はそうした結論から単純に想像されるようなことに尽きるものではない。

建国は日本仏教界に邦人布教に留まらない政治的・文化的役割を期待する局面を与えた。といっても、傀儡政府や関東軍関係者によって与えられたというだけのものではない。日本仏教界が積極的に接近を試みた部分もはなはだ多い。一体に、日本仏教の特徴であり欠点であったことは、宗派色が極めて強く排他的なこと、および經典主義に固執して經典に記されないことや民俗的儀礼に冷淡なことであろう。日本仏教はそうした特徴をそのままに中国に持ち込んだがために、邦人には通用するものの、中国東北地域では宗派にあたるものが極めて希薄で、その上、仏教といっても道教との混淆のような実態を呈し、かつ信仰は儒教的民俗儀礼の様相でもあったから、とても中国人に受容されるものではなかった。おまけに、僧侶は身分的に低位に置かれる土地柄であったから、日本僧が精神的指導者として尊敬を勝ち得ようとすることにすら大きな無理がある実情

であった。そうした際に、なすべきことは何であるかは自明のことであろう。政府関係部局の指導もあったのではあるが、宗派色を捨て、一致団結して満州仏教の現状への対処方策を考えることであった。なかにも、中国僧・居士（在家仏教者）に積極的に接触して、彼らを日本仏教の理解者に育成し、彼らを介して中国人への布教を進めることは、日本仏教界が当該地でなすべき最重要の課題となった。

ここでは、一九三五（昭和一〇）、康德二年、満州国文教部札教司編の『満州の仏教と其の諸問題』に拠りながら、当時の日本仏教界の抱えていた諸問題を探ることにする。邦人への布教の問題を採り挙げるのではなく、満州仏教にどう対処すべきかを論じている点が興味を惹くからである。

さて、『満州の仏教と其の諸問題』は前年の康德元年八月二一日に「ヤマトホテル」で開催された「偽満州国」文教部主催の宗教座談会の記録である。ヤマトホテルは大連・瀋陽（奉天）にもあった東北部侵入の象徴的な存在である。現在では中国の民族系ホテルとして経営が続けられているが、新京ヤマトホテル（大和旅館）は駅前広場に面した一等地にあって、当時は日本系豪華ホテルという存在であった。宗教座談会の出席者を挙げよう。

全日本仏教青年連盟理事長	大村 桂巖
同 随員	稲葉 文海
哈爾濱極樂寺	今井 昭慶
新京般若寺	都築 玄妙
新京東本願寺	畠山 頼哲
同 西本願寺	光岡 智玉
同 経王寺	谷口 慈祥
同 長春寺	伊藤 芝信
蒙政部総務司長	関口 保
新京特別市公署総務処長	植田貢太郎
協和会中央事務局次長	平島 敏夫
大同報社副社長	都甲 文雄
文教部	久米 総務司長
同	神尾 学務司長
同	張 礼教司長
同	水島 理事官
同	林 属官

全日本仏教青年連盟理事長大村桂巖の新京来訪歓迎を機会としたこの会は、久米文教部総務司長の挨拶と司会で始まった。座談会は、まず「仏道二教の混淆と今後の問題」

という話題から入っている。そこでは、主としてハルビン極樂寺の今井が東北地域の実情を説明しているが、この今井といふ新京般若寺の都築といい、東北地方を代表する二つの中国天台寺院の僧侶代表といひながら日本人である。今井の説明によれば、一九三一（昭和六）年に極樂寺に行き、五三日かけて沙彌戒・比丘戒・菩薩戒について軍隊以上に厳しい受戒儀礼を経て入寺したのだという。都築も同様に般若寺に住僧としてあつた。極樂寺では仏教と道教を峻別せず、日本の役人が両者を隔てようというならそれはおせっかいといふべきと中国僧は思っていると語る。本尊に阿弥陀・釈迦・観音などを祀っていてもそれらに区別があるのでもなく、まして、經典に基づいた人民教化でなくてはならないなどはまったく考えていない。地域として宗教一般に共通するのは、阿弥陀および観音を主な対象として信仰しているということくらいだという。

そうしたなかで、今井たちが特に期待を寄せるのが極樂寺の如光という年齢四一歳の青年僧であつた。「正當なる仏典を基礎として講義をし、民に仏の心を伝えて、善化し善導し、修道し済度していく」<sup>⑤</sup>という新しい主張を掲げ、如光一派と称する仏教改革派青年僧グループのリーダーである、その存在を高く評価する。如光はこうした思想を

日本で身につけたと披露し、如光の力を借りて、政府文教部の指導の下に「満州国」を本当の仏教国、すなわち平和の楽土たらしめて建国の意義を達成したいと主張しているを紹介する。こう見てくると、この今井がわざわざ中国寺院の僧となつて極楽寺に住まいしていることには、明確な意図があることが見えてくる。すなわち、満州仏教について事情視察をすることと、如光たち青年僧グループを日本仏教理解者として提携し、彼らを通じて東北地域に日本仏教的な仏教思想を普及させようということである。

話題は「満州に於ける在来宗教の特性」に移るが、またしても今井は倭虚という中国僧の名を挙げて、この僧は天台宗第一二世座主で当時は青島に居り、満州仏教が道教に征服された体の現状を嘆き、満州仏教界の不振に憤慨してハルビン極楽寺・綏化楞嚴寺を創建した新進仏教と称される流れの首魁であるとする。この僧に対しても日本仏教が提携すべき相手であるとして見ているようである。さまざまな民俗宗教的事例が次々と話題になり、迷信を脱して正しい宗教である日本仏教をいかに敷衍させるかという段になって、大同報社の都甲が次のように発言する。仏教が迷信然とした儀礼に終始することが、仏教イコール迷信という考えを当該地中国人青年インテリ僧に植えつけていたけれど

も、日本に行つたことのある者は日本に栄える近代的文物に驚くとともに、日本人が仏教を信じていることを見て意外に思い、かくて迷信ではない文明進歩を支える本当の仏教というものがあるのではないかと思うに至るという。

「僧侶の教養と戒律」の部分では般若寺の都築が中国僧一般の低い教養・信仰の程度について報告している。寺院の構造は禪宗に似て、信仰的には浄土宗に近い（阿弥陀經を誦する）。阿弥陀の名を唱え戒律を守つてさえいれば、日本の宗教中学程度の教養でも十分に知識階級に属する。

宗旨には無関心な僧が多く、国家観念などは持たないのが誇りであつたので、彼らに「満州国」の国家意識を植えつけていくのが日本僧の仕事の急務であるとしている。新進の若くて意欲ある中国僧・居士を連合し、政府が協力して組織作りを行つた上で、第一に中国僧を、第二に「満州国」国民全体を導くのがよいと結んでいる。この、僧と居士との関係については、ハルビンに極楽寺ができて仏教会が組織されると、その中にハルビン居士林という組織が属していくという具合で、切り離せない提携関係を両者は有しているし、長春般若寺にも居士仏教会があつて説教には七〇〇人もの男女が集まるといふ。如光・倭虚も元来は居士であつたものが、人々に望まれて僧侶になつたといふ、

居士仏教が満州仏教の新しい活力の源泉であることを無視すべきでないとする。「満州国」建国後の中国東北地域において、日本仏教界がいかなる役割を果たそうとしたかが、端的に分かるであろう。まさに国策準拠。国策荷担には違いないが、現代の立場からはまったく不必要なことに思えても、当時においては、そこに侵入した日本人指導者と日本仏教界にとって、仏教改革運動を現地に喚起し、それを支援しまた監督することが建国後の民心支配に必要であるとする方向が模索されていたことは興味深い。その意味で、当該地の日本仏教界地図は、建国以前は浄土真宗本願寺派が第一の宗教勢力であったものが、一九三一（昭和六）年の柳条湖事件（九・一八事変）を境に現地満州仏教の指導を視野に入れるようになり、建国後は天台宗がその主導権を握るようになっていく。それは、関東庁当局による宗教事情調査の結果として、居士を率いて仏教改革を志向する如光・倭虚が天台宗とされる極楽寺・般若寺を根拠に活動していたことに対し、日本天台宗から若手僧（今井・都築ら）が派遣されて中国僧になり、如光らとの提携を図りながら、やがては日本側の指導に帰するように導かんとする深慮であったと考えられる。

### 三、満州仏教が蒙った影響

さて、満州仏教の青年僧に期待をかける以上、それと提携する相手の一つとして、日本側では当時の仏教青年会にも期待が寄せられたようである。この座談会は、日本から全日本仏教青年会連盟理事長の大村桂蔵が来訪したのを機に行われたことは先述した。全日本仏教青年会連盟とは、当時の帝国大学の学生（および卒業生）による仏教青年会に、慶応・早稲田・日本・中央・明治・法政の各大学、さらには東北や関西の私立大学の仏教青年会、あるいは各寺院の仏教青年会までを組織した会員数では十万人に及ぶ組織で、宗派を超えて仏教精神による仏教的活動を行うのが趣旨であった。大山が長春に赴いた直接目的は、四年目ごとに開催することになっている汎太平洋仏教青年会大会の、第三回開催地として候補に挙がっている「満州国」の仏教界の視察であって、アメリカ西海岸・タイと並ぶ開催候補地を訪れ、関係を深めるためであった。汎太平洋仏教青年会は、第一回大会をハワイで開き、第二回はこの前年の一九三四（昭和九）年に日本の東京で開催されていた。その時の満州仏教代表団は二八名で、その団長が如光だったのである。ほかにも若手有力僧には乗一・普光ら一〇〇人ほ



どの如光配下の青年僧があるといい、第三回大会を誘致するのを機会として、新たに中国僧と居士による全満州仏教連盟を立ち上げ、その下に全満州仏教青年会を組織して活発に活動してもらった良いなどと話は弾む。如光は新京市公署総務処長植田貢太郎や財政部大臣孫其昌に大会誘致の働きかけをする<sup>⑦</sup>と約束していたらしい。ここで気づくことは、如光の行動はもちろん自発性に基づいてはいるが、如光を支援する立場をとっているこの座談会の顔ぶれを見れば、如光は紛れもなく日本側に利用されていると分かる。如光の溢れる情熱は、日本の比叡山を訪問した時に述べたとされる言葉に表れているという<sup>⑦</sup>。

日本の仏教の色々のことを見て自分は驚いた。今まで自分達は社会、国家と云ふものに関係なくて所謂一切を棄てて、即ち家を棄てて出た所の出家であるとして只念仏を唱へ仏に使へるだけが出家の為すべき事である、社会、国家に携わるやうな事は出家の為すべき事ではないと云ふやうに思つて居つたが、それは非常な誤りであつた。僧侶も国民の一員であるが故に是非お国に尽さねばならぬ。

もちろん脚色して伝えられた言葉であつて、「満州国」の日本仏教界がどういう性格を持ち、満州仏教に何を望んでいたかを端的に示していよう。しかしながら、多分にこれに近い発言が如光自身によつて語られた可能性はあり、如光が満州仏教の若手リーダーを自負していたことも十分に類推できる。つまり、満州仏教界にも、日本の指導を受けながら仏教振興を図ろうとする動きがあつたと見てよい。まさに日本の意図にはまつていることは否めないが、当地の仏教界に与えた影響がここにあつた<sup>⑧</sup>とすることは、あながち的外れではないであらう。

二〇〇〇(平成一一)年三月刊行の吉林省地方志編纂委員会編『吉林省志』によれば、一九二九(昭和四)年に大同仏教会が浄土真宗本願寺派(西本願寺)入野契則の提唱で成立し、この座談会前年の三四(同九)年には植田貢太郎によつて満州国仏教護法会という日本主導の満州仏教団体が創設され、これは三九(昭和一四)年には満州国仏教総会に発展して如光が会長に就任している。これをみれば傀儡団体の色彩は明確で、事実、副会長であつた新京般若寺僧樹培による一九八四(昭和五九)年発表の論文「偽満州国仏教総会会長如光」は、如光を日本に籠絡された売国僧として散々に評している。この論調を承けて、一九九五

(平成七)年の王魁喜「抗日戦争時期(一九三一—一九四五)日本利用宗教侵華問題初探」、および二〇〇二(平成一四)年の程舒偉「中国東北部被占領期における宗教を利用した日本の侵略問題に関する論評」<sup>⑨</sup>においても、如光に對しては同様の評価となっている。現状においてそれを否定する材料もないし、またあえて否定しようとするものではないが、日本仏教に憧れ、日本仏教に学ぼうとしてそうした結果を招いたとすれば、如光の扱いにはもう少し考えるところがあつてもいいかも知れないと思う。倭虚についてはそうした厳しい評価はないのであり、どこで二人の評価の差ができてくるのかは更なる追求が必要であろう。倭虚は日本に利用されなかったということであろうが、何がどう違つていたのかを、二人の思想から比較できるようになればと思う。日中両国が侵略の確認だけことをすませる時代は學術の面においては終わりにしたいものと願うところである。

確かに「満州国」建国は満州仏教に一つの影響を与えたといえよう。満州仏教からすれば、影響を蒙ったことは事実であろう。しかし、これがどこまで満州仏教界に浸透し、また民衆世界に敷衍されたかは未詳である。予見としてはほとんど民間レベルには影響がなかったと考えてきただけ

に、再考の余地を与えられたことはまた研究上の僥倖とせねばならない。

### おわりに

この小稿は、先にも触れた進行中の総合研究『植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究』の前提を成すものである。中国東北地域に既存の仏教・キリスト教・イスラム教・ラマ教・その他、ならびに薩満教に代表される民俗宗教などが、日本の侵出によつてどのような影響を受け、どのように再編され、あるいはされないように対処したのが最大の関心事である。この研究のためには、日本側資料と中国側資料のつき合わせ、あるいは両国研究者の相互協力と共同討議が必要である。何事も一朝一夕にいかないことは重々承知しているが、少しづつでも歩み始めないととても成果は見えてこない分野である。幸いにして、本学桂華・李両先生に援けて戴き、牛の歩みを始めるに至つてゐることであり、結論が先行してきた「日本仏教の侵略荷担」を具体的資料に沿つて見直し、また中国東北部の眼からも見ることをなしていきたい。<sup>⑩</sup>極めて簡略、かつ粗雑なスケッチに過ぎないが、規定の紙幅に達したので、当該研究に関するより熟した内容ある別稿を期して小稿を閉じる。

## 註

- ① 本学からは桂華・李両助教授が参加。ほか、国内研究者四名、本学学術提携校中国東北師範大学教授四名、同外語学院助教授一名参加。
- ② 単行本化されたものとしては、浄土宗『海外開教のあゆみ』、浄土真宗本願寺派『海外開教要覧』、真宗大谷派『宗門開教年表』など。
- ③ 拙稿「真宗大谷派における中国東北部（満州）開教事業についての覚え書き」（『大谷大学研究年報』第四二集、一九九一年所収。小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』法蔵館、一九九二年、に収録）。アジア布教が従軍布教に始まることは各宗に共通することが分かっている。
- ④ 中国長春市、東北師範大学中文系呂元明教授のご指示による。
- ⑤ 『満州の仏教と其の諸問題』 満州国文教部礼教司編、一九三五（昭和一〇）年、一一ページ。
- ⑥ 『南満州ニ於ケル宗教概説』 関東庁内教化事業奨励財団編、一九三一（昭和六）年刊、による。それによると、日本人の中国東北地域における宣布活動を三大別し、日露戦争の従軍布教の後にその地に留まったもの、関東州および満鉄附属地租借後に布教使を差遣したもの、在住邦人が葬送・法要の必要上招いたもの、とする。その上で、仏教は第一に発して第二・三と拡張、神道は第二、キリスト教は第一・二によるとする。また、仏教では、浄土真宗本願寺派が「率先シテ至大

ノ功績ヲ挙ゲツアルノ実情」と評価する。次いで浄土宗鎮西派、次に臨済宗、そして日蓮宗を評価する。ちなみに、真宗大谷派への評価は、大連における一九〇〇（明治四三）年からの満蒙開教監督の行動と、大連別院内に一九二六（大正一五）年に設立された大慈園（育嬰・孤児・養老施設）の社会事業に対しての評価に留まっている。「満州国」建国前の大谷派の活動は南満州に限られ、長春には小さな布教所しか持っていなかったからである。

## ⑦ 『満州の仏教と其の諸問題』四二ページ。

⑧ 『長春文史資料』第五輯所収。吉林省長春市委員会文史資料編纂委員会編輯出版。

王論文は『近代中国与亜州』学術論文集（上）所収。程論文は『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第一九卷所収予定。なお、両氏ともに、本学が学術提携する中国東北師範大学に籍を置く研究協力者である。

⑨ 二〇〇二（平成一四）年二月の大谷大学史学科懇話会での、筆者による関連話題の提供に対する諸先生方のご示唆が成稿を促すことになった。諸先生方には記して深謝申し上げたい。

（本学教授 国史学）